

安野発電所フィールドワーク

広島中央保健生協吉島支部 ピースカフェ班 温品美和子

11月20日(金)雨上がりの紅葉の中、9名の参加で現地へ向かう。講師は継承する会の川原氏。

中国人強制連行の時代背景、日本全土への概要、安野発電所、坪野収容所、関連施設の地理的分布等を学んだあと、いよいよ各所へ。

「安野 中国人受難之碑」「坪野収容所」

ここの碑の際立つ特徴二点に感銘。慰霊碑ではなく、この地へ連行された方360名全員の名前が刻まれた受難之碑であることが一点目。名前は、中国が戦勝国であったが故の状況から企業が作成した報告書に記録が残っていたという。名前すら不明の1600人はいた(1944年8月時点)とされる朝鮮人についても思いを馳せる。二点目は、碑文が被害者・連行された中国人と加害者・西松建設の連名であること。これは日中双方の実態解明、補償交渉、裁判を経ての努力から和解に至る営みに依拠している。



収容所があった地を目の前に、劣悪なバラック小屋＝見張り付きのまるで監獄、衣食の苛酷さに言葉もない。

発電所「送水管上部」

約50mの送水管三本の上部へ200段の階段を登る。急勾配で息も絶え絶え。一食、にぎりこぶし大のどんぐり粉マントウ一個で、この坂を二往復し働かれた

のだ。そこで見たのは、8キロ先の取水口から延々と掘られた導水トンネルの出口。直径3.8mのトンネル口から流れくる水が青々と貯水部に湛えられ落差に備えていた。

トンネルの土砂をトロッコで運び出し、発電所の基礎工事の山を切り開く仕事を昼夜二交替で行う。トンネル内はポタポタ落ちる水でベタベタにぬれた服。そのまま外に出る冬の夜の寒さは尋常ではない。生命が……。

「土居取水口」滝山川の水を導水トンネルへ

私たちは、車で楽々と。しかし、この道の山々を延々とダイナマイトで爆破し、土砂を掘り出し……。太田川支流の滝山川を塞ぎ止め、取入口へ誘導されていた。追加補修工事が施され、今は、塞ぎ止め堤の一部のみが当時の姿を伝えている。巨大なごみ落葉収集クレーンの作動を見るにつけ、大きな戦争に呑み込まれた人々の労苦、それを見えなくさせられてしまう私たちの陥りやすい弱さを感じた。

終わりに

安野発電所は、軍都広島が戦争をおし進めるのに必要な電力を賄うために建設された。1944年4月、西松組が厚生省に中国人労働を申請、許可され、社員を中国に送り込み収容所から貨物船で連行、日本軍が見張ったという。

戦時下の日本135の事業所で危険な重労働を強いた末に、連行された約4万人のうち約7千人が命を落とされた。つくづく侵略、加害行為そのものの戦争の、日本の過ちを想う。

今も安野発電所が稼働し恩恵を享受していることに痛みを覚えつつ、学び伝えねばならないと感じる有意義な機会を頂けたことに感謝している。

(中電の方にもお世話になりました)